

## 20回オフシェルフォーラムへの寄稿

### “つれづれなるままに”

佐久間弘文

ドレスト光子研究起点

02/07/2022

定年退職後、小嶋先生、大津先生との「御縁あって」、自宅に近い最寄り駅から駅一つの距離にあるドレスト光子研究起点で自由に研究できる環境を頂き、すでに4年近くの時が過ぎました。年に一回位の頻度で、何かのテーマで投稿して欲しいとの事で、今まで、2, 3回投稿し、前は西郷さんの圏論の本についての感想を書いたと記憶しています。今回は、少し趣を変えて、上記のタイトルで書いてみようと思いました。これは、有名な徒然草の書き出しですが、私は、高校生の時、“暗記もの”の歴史と、古典、漢文は大の苦手、担当教師に、漢文は「チンプンカンプン」、古典は「コテンコテン」なので、間違っても授業中に私を当てない様にと毎年要望してきましたが、そうはいかないと、ことごとく無視されてきました。その様な私でしたが、心のどこかに徒然草の一節が残っていて、今の自分の気持ちをそれに重ねて書こうなどという事が起きる事は、高校時代の私にとっては想像出来ないことだと思います。今回の話は、何故そうなったのかという事を非常に手短にお話しようと思ったのですが、説明になっているかどうか、甚だ怪しいので、気軽に聞いて頂ければと思います。皆さんの中には、古典に造詣が深い方も、また、私の様に全く苦手であった方もおられると思いますので、後者の方の為に、徒然草の一節を少し、書いておきます。

「つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かいて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなくかくつくれば、あやしうこそ、ものぐるほしけれ。」

という事で、以下には、自分の人生を簡単に振り返り、その上で、特に歴史の大きな転換点である今という現実と直面して、何を感じているのかを、「そこはかとなく書いてみました」というのが、今回の私の短い寄稿の内容です。

10代の後半から20代の後半にかけては、自分なりに人生や世界（特に自然界）の神秘に惹かれ、色々な事を知りたいという強い想いがあったので勉学にエネルギーをかけました。当時の事を振り返ると、自分を取り巻く環境の中にあつた二大要素が思い出されます。一つは、20世紀は「物理（学）帝国主義」時代と呼ばれるように、物理学が学問の中で最も価値あるものであるといった雰囲気があったと思います。私自身は、物理学＝物の学問 → 唯物思想という風には割り切っていませんでしたが、当時は、“インテリ”はマルクス・レーニン主義を学ぶのが常識といった雰囲気もあったのは確か、私はそれに強く反発してい

ました。世界は、単純な唯物論で割り切れるようなものではないのではという強い想いはあったものの、物質を超えた世界の事など、自分にとって知る由もない事なので、とりあえず、人間の身勝手な思想の暴走に対する歯止めとして働く、実験事実がある自然科学を勉強しようとの想いでいた様に感じます。

30代から60代の始めにかけての大きな事は、世界には確かに物質を超えた世界がある事を確信に近い形で感じ得た事と、それと同時に、社会活動に深く関わる年齢になる事で、人間社会の色々な負の側面を体験できた事です。一言で簡単に言ってしまえば、人間、あるいは人間社会の「光と闇の現実」を観念としてではなく、実体験したという風に表現できると思います。一例を挙げれば、気候変動に関する大きな研究組織にいた為に、国連に関する活動も関係する事もしばしばありました。もちろん、どんな組織にも、個人的には立派な方がおられる事は、間違いのない事だと思いますが、私は、総体としての国連が出すレポートのつまらなさに、その様なレポートをまともに読んだ事はありません。心の底から人を動かす感動のエネルギーがまったく感じられない“ダメ官僚”の作文のようで、何故そんなつまらない国連が存在するのか自分には謎でした。

しかし、ここ数年の激動する世界情勢を見るにつれて、今すべての謎が一つ一つながってほぐれた様に感じます。特に、ここ数年は、加速度的にインターネット上の情報を通して、今まであまり表面に出てこなかった事が次々と出てきます。その様な情報から、個人的には、今年に行われる米国の中選挙（現在進行中の米国の“内戦”）の結果が、今後の世界がどうなるかを定める大きな分水嶺になるとそう感じています。日本も米国と同じ様に大変な危機的状況にあると思いますが、表面的には平和の様に見えます。しかし、それは、戦後の大きな流れの中で、日本は、国のビジョンとか国防には多くの国民の関心が向かないような、世界的にはとても信じられない雰囲気を作りだされている国になっているためだと思います。日本も、米国と同様に政治的にも大きな変化が迫られている、今年の参院選を切っ掛けとして、新たな一步を踏み出そうとする動きもあるようです。それに期待している一人です。冒頭に、「暗記もの」の歴史は嫌いと言いましたが、今現在、世界がこういう状態になっている事は、決して偶然起きている事ではなく、特にここ200年の歴史が大きく関係している事が、ここ1, 2年によくわかりましたので、今は、歴史を学ぶ大切さを痛感しています。

ここ1, 2年の自分が書いた論文の中には、Einsteinの一般相対性理論の式を使うものもありますが、これまで、自分の中には、一般相対性理論は1915年に発表されたという様な知識しかありませんでしたが、歴史を見直す視点で改め

て1915年をみると、それは数百万人の犠牲を出した、第一次世界大戦の真つただ中の年です。そして、その2年後には、ロシアのロマノフ王朝が革命で倒され、マルクス主義を推進するための政治組織としてのソ連がレーニンにより作られました。第一次大戦終了後、20年位の後、再び第二次大戦が勃発します。その時、Einstein は、命の危険を感じ米国へ亡命しました。相対論や量子論を構築した欧州の科学者が生きた時代が、まさに戦争の時代であった事を改めて確認すると同時に、共産主義は1989年に崩壊したソ連と共に崩壊したのではなく、中共にも受け継がれ、またそれ以上に、米国内にも深く浸透し、今まさにcancel culture で米国を破壊し、国連を手段として使い（日本の企業もこぞって参加しているsustainable development goal (SDG)）、世界を全体主義一色で統一しようとしています。

この様に、現実はとても厳しいものがありますが、自分の中には、世界の本質は物質を超えたところにあるという確信があり、そこに希望を見出しています。簡単な言葉でいうと、自らの人生で出会う出来事は偶然ではなく、意味があるという事です。また人は肉体を超えた存在であるとも実感しています。私は、これまで、ずっと自分はどのようにして大気や海洋の力学を研究する道に導かれたのかわかりませんでした。しかし、今、私は小嶋先生、西郷さん、岡村さんと共に時空の創発に関する新しい論文を書いています。この論文を見直しながら、今一番感じる事は、もし、私が大気・海洋の分野にいなかったなら、けっしてこのような論文は書けなかったと思います。これは、導かれての事だと感じます。高校生の頃の話から始めましたが、60代の最後の年を生きている自分にとって、この人生で得た一番の大きな事は、世界や人生は単純な失敗や成功を超えた、もっと大きな意味があるという実感です。ドレスト光子研究起点を進めるoff-shell 科学という事も、私にとっては、on-shell が物質にのみに焦点した科学であるとした場合、その先の物質を超えたものを象徴的に含むものと感じています。その意味においても、私は導かれてここに来たとそう感じています。